



## レコードで聴く クラシック音楽鑑賞会

5月20日(土) 14時～

会場●2階ハイビジョンシアター 無料

主催●北島町立図書館(☎088・698・1100)

■アナログLPをレコード・プレーヤーで再生し、クラシック音楽を鑑賞する会です。約1時間を予定しています。お気軽にどうぞ。

## 日舞同好会 四季の舞発表会 ⑬

5月28日(日) 12時～

会場●3階多目的ホール 入場無料

出演●日舞同好会・四季の舞

主催●日舞同好会・四季の舞(藤田☎088・698・5548)

### 【注目のイベント】

## 中村敦夫・一人芝居

### 朗読劇「線量計が鳴る」

元原発技師のモノローグ

6月3日(土) 18時半～

会場●般若院・本堂(徳島市寺町92) \*駐車場はありません。

入場料●前売2500円(当日3000円)

出演●中村敦夫(俳優、作家)

主催●中村敦夫・一人芝居の会(住友☎090・3180・4714/088・652・6754)

■徳島で出家し僧侶ともなった俳優・作家の中村敦夫が、一人芝居「山頭火」に続き、仏教エコロジーの立場から福島原発事故の持つ意味を追及する。昭和の名優が命を削って送る、熱量ほとばしる渾身の一人芝居。ご注目ください! \*徳島市内の催しです。ご注意ください。



中村敦夫

「山頭火」に続き、俳優・作家の中村敦夫が、一人芝居「山頭火」に続き、仏教エコロジーの立場から福島原発事故の持つ意味を追及する。昭和の名優が命を削って送る、熱量ほとばしる渾身の一人芝居。ご注目ください! \*徳島市内の催しです。ご注意ください。



## 創世ホール名画観賞会 25 この世界の片隅に

6月10日(土) 2回上映

①10時半～ ②14時～

会場●3階多目的ホール

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1300円)、小・中・高当日のみ700円、シニア(60歳以上)当日のみ1000円

作品●「この世界の片隅に」(2016年、日本、126分)

声の出演=のん、細谷佳正、稲葉菜月ほか 原作=この史代 音楽=コトリンゴ 監督・脚本=片淵須直

主催●創世ホール名画鑑賞会実行委員会(☎088・698・1100)

■第90回キネマ旬報ベストテン第1位、同監督賞受賞作品「この世界の片隅に」が、北島町で1日限りの上映決定! ■1944(昭和19)年2月。18歳のすずは、突然の縁談で軍港の街・呉に嫁ぐことになる。新しい家族には、夫・周作、周作の両親、義姉・径子、姪・晴美 ■配給物資がどんどん減ってゆく中でも、すずは工夫を凝らして食卓をにぎわせ、衣服を作り直し、時には好きな絵を描き、毎日の暮らしを積み重ねてゆく ■1945年3月。呉は、空を埋め尽くすほどの艦載機による大空襲を受ける。すずが大切にしていたものが失われてゆく。爆弾の炸裂によって彼女は右手を失い、幼い姪が命を落とすのだ ■それでも毎日は続く。そして1945年の夏がやってくる ■日本中の思いが結集! 百年先も伝えたい、珠玉のアニメーション ■主人公すずさんを演じるのは女優・のん(能年玲奈から改名)。監督が絶賛したその声で優しく、柔らかく、すずさんに息を吹き込んだ ■本作の音楽はコトリンゴが担当。ナチュラルで柔らかい歌声と曲想が、すずさんの世界を優しく包み込む ■皆さん、お見逃しなく。多数ご参集ください!



# 文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

## 「北島音頭」をめぐって●小西昌幸

■2013年12月19日午前9時。古川保博町長から電話があり、ちょっと町長室に来てくれと言われた。当時私は、北島町教育委員会事務局長という立場で毎日目の回るような出来事の中で、荒波にもまれ、喘(あえ)ぎながら仕事をしてきた(会議や協議事項や相談事や決裁事務が無数にあり、夜間や休日の仕事も物凄く多い。自宅にいても気を許すことはできない。詳しい事情は差し障りが多々あるので省略)。町長室に出向くと、町文化協会の幹部女性3人がいた。次の案件について、知恵を出して対応して頂けないか、というのが町長からの要請だった。

■【町長発言要旨】「北島音頭」という歌が存在する。秋の文化協会芸能大会などで披露されているが、1980年代に作られたものなので、オリジナルを尊重しつつ、そのニューバージョン(のちに21世紀版と呼称)を考えてみて欲しい。できればCD化もできないか。相談に乗ってあげてくれないか。

■とりあえず、ご要望の趣旨をお聞きし、資料をお預かりし、何とか自分なりに考えてみますということになった。その宿題への取り組みは、長い長い時間をかけることになった。まず、今回作るのは「北島音頭21世紀版」とし、それに対して原曲は「北島音頭オリジナル版」と呼称してはどうかと考えた。そして21世紀版とオリジナル版を合わせた形でCDにするというのが基本構想である。また完成作品は、数年後、役所内で年末大掃除の際に大量にゴミに出されるような、罰当たりな事態だけは絶対に避けなくてはならないと思った(一般論だが意外とこの種のことが世の中には多い)。

■私はこれまで、自主制作CDの解説文を書いたことが3回ほどあるが(クイン・ビーという女性バンドのファーストとセカンド、スーパーミルクという既に解散している関西のバンドのライブ発掘音源盤)、あくまで文章仕事であり、CD制作は未経験である。

■そして毎日の業務に忙殺されているうちに、あっという間に月日は流れていった。その間、新しい作詞を誰に依頼するべきか、CDをどのように作ればよいか、資金はどうするのがよいか、またこれが重要なのだがオリジナルに十分敬意を払った形で、全関係者が気持ち良い思いで、このプロジェクトを実現するためにはどうすればよいか、折に触れて考えてきた。熟成発酵させていたといってもよい。私は自分のミニコミを1冊作るのに15年かけた人間なのだ。時間をかけることはいとわない、というか時間がかかるのだ。この種の仕事を私に任せるのが悪いのだと半ば開き直ったような気持ちであった。たまたま、その後(2014年後半)「ひょうたん島の源九郎」という曲の作詞に関わることになり(完全に巻き込まれた)、プロの音楽家と向き合うことの凄まじさと命を削るような厳しい創造の現場(真剣勝負の世界)の深淵を覗き込むことになり、物凄く苦労した。自分の力量やふがいなさを思い知ることとなり、二度と作詞はごめんだと思った。

■私が作ることはない、私は調整役に徹するのだ。ならば誰がよいか。小松島市在住のプロの作詞家・東根泰章(ひがしね・やすあき)さんが浮かんだ。東根さんとは以前に、鈴木綾子さん(徳島ペンクラブ幹部)の出版記念会で挨拶を交わし、名刺交換をしたことがあった。レコーディングとCD制作は、これはもう長年の友人川竹道夫さん(ギタリスト、エミールソフト開発創設者)しか相談相手はいない。制作費の捻出は、3年計画で、生涯学習関係の補助金から支出すれば何とかかなるのではないかと、そうすれば新たな町予算計上をしなくても済むのではないかと、そんなことを唐突に思い

ついた。やっとな実現への目鼻立ちがついて来たのは相談を受けてから1年以上経過した頃だった。何しろ私は毎日毎日、その日暮らしのようなハードな日々を送っていたのだから仕方がない(繰り返しになるが、そもそもこんな私にこの種の仕事を任せるのが悪いのだ)。

■まず大きな問題は、仕事の発注や制作のタイミングだと考えた。プロの方に仕事を依頼する以上、絶対に相手に失礼があってはいけない。このことを考え抜いた。結局この種の仕事の発注のタイミングは、依頼側(小西)の気持ちが高まった時こそが、好機なのだ。20年以上、催しの企画や広報の仕事をしてきて、多くの人たちに講演や演奏会出演の依頼をしてきたからよく分かるのだが、これは大切なことであり、何しろ重要な仕事をプロにお願いするときに、その内容や人選理由の説明が相手にきちんと伝えられなくては、どうしようもない。全く失礼なことになるのだ。

■2015年3月に東根泰章さんに電話をかけた。3月議会が一段落した時期だった。東根さんは、電話をして1時間もたたない内にやってきた。何でも丁山俊彦さん(元郷土文化会館～元県立文学書道館、本県文化界の重鎮)と会っていたのだという。丁山さんは私も面識がある尊敬すべき大先達だ(『あわわ』創刊や黒テント等の演劇公演にも深く関与)。恐らく東根さんと丁山さんはその頃、モラエスの歌を作る打ち合わせをされていたのではないかと思う。私が電話をかけた時、東根さんは、ポッポ街のビルにある丁山さんの事務所におられたので、北島町にすっ飛んできたというわけだ。■東根さんに趣旨をお話し、資料一式をお渡しした。その際、たくさんのお話を伺った。東根さんは私の出身大学の先輩でもあった。数多くの作詞作品が録音物になっていて、そのレコーディング時の恐ろしい、厳しい音楽業界の話聞き、非常に心が引き締まる思いがしたのだった。

■「で、小西さん、締め切りはいつですか?」。東根さんに問われ、私は「3か月後でいかがでしょうか。あるいは、もっとじっくり時間をかけたり、取材する必要があるということなら、そのようにさせていただきます」とお答えした。東根さんの返答は意外なものだった。「1週間後にしましょう。緊張が継続してよいですから。私は腰を抜かしそうになった。やはり50万枚のヒット曲を持つプロ作詞家は、心構えが全然違う。代金についても今払っておきます」というと、完成後でよいと言われた。感服の連続だった。

■翌日午後3時半、私は東根さんから電話をもらった。「完成したので今から行ってもよいか」という。しかも、「デモ音源も作ったので持参する」という。正真正銘、私は驚いた。いったいどこにそんな時間があったのか。

■役場にやってきた東根さんは、徹夜で作ったといった。元の歌を百回以上聞き続けたという。そして、徳島市に住む民謡歌手の知人にさっき仮に歌ってもらって、カセットでデモテープまで作ったというのだった。もう感謝するしか私にはできなかった。小松島方向に足を向けては眠れないと思った。その後しばらくして、東根さんクラスの方に作詞を正式に依頼する場合、当方が用意した金額の5倍6倍が本来の相場なのだとことを知り、ますます冷や汗をかいたのだった(東根さんは私のことを買い被っていて、どうも私が依頼したことを喜んでおられるようなのだった)。

■次はレコーディングだ。私の身近では、川竹道夫さんしか相談相手はいなかった。川竹さんには「北島トラディショナル・ナイト」や坂田明さんのコンサート時には常にお世話になっている。氏がまた、とんでもない人で、例えば城南高校の同窓会の記念文集(『我ら団塊1年生』)の編集が滞っていると聞き、それなら自分でやると宣言し、猛烈な突貫工事で作業を進める内に、付録に寮歌や応援歌などのCDをつけようと突然思い立ち、本当にそれ(9曲入り)を短期間で実現してしまうのである。その後、同

志社大学ギター部の本を手掛けたときにはCD2枚の付録を作ってしまったはずだ。その時も突貫工事だったと聞いている。東根さんも凄い人だが、川竹さんも怪物のような人なのだ。だから、レコーディングやCDのプレス発注については、川竹さんに相談することにしたのだった。

■川竹道夫さんに正式に資料一式をお渡しし、趣旨と計画を説明したのは、2016年だっただろうか。年内にレコーディング完了、次年度プレスということで承諾いただいた。奇遇なことに川竹・東根ご両人は面識があることも判明した。そして21世紀版には歌入りの音源とともにカラオケバージョンも入れようということになった。CDは3曲入りとし、①川竹さんのグループによる21世紀版、②同カラオケ、③故夷谷清三郎さん(元北島町文化協会会長)の歌唱によるオリジナル版という構成にすることで進めている。■21世紀版の録音は2016年中に終えたということだった。あとはミックスダウンとプレス発注、解説書の印刷発注だ。川竹さんから私に対して、レーベルデザインと、ブックレット(解説書)の着手要請があった。

■こうして21世紀版は着実に進行していった。並行してオリジナル版についての研究を進めた。まず何よりも、オリジナルの作詞作曲者・赤野壽(あかの・ひさし)さんが最重要人物である。残念ながら、壽さんも夫人のセイノさんも長男昇さんも他界されている。従って、今北島町に住むご遺族の赤野史子さん(壽さんの長男昇氏の妻)のお話と貴重な資料の数々が大変有効なものとなった。史子さんに深く感謝する次第である。

■「北島音頭」オリジナル版の作詞作曲者・赤野壽さんは、大正5(1916)年9月13日三好郡三名(さんみょう)村[現三好市山城町]字上名(かみみょう)出身。家は旅館業を営んでいた。昭和11年大型第2種運転免許を取得、脇町や徳島市のバス会社やタクシー会社で勤務。昭和14年にセイノさんと結婚。昭和18年に召集され満州へ。敗戦後はシベリアに抑留され、大変な苦勞を経て昭和23年8月に帰国。抑留中に慰問団の音楽演奏に癒されたことや、帰国後昭和26年から国立板西療養所(現東徳島病院)で事務職として働く中でギターを習い始め、同時に作詞修行に精を出す。昭和37年頃から作詞作品の放送やレコード化の実績あり(放送はラジオ大阪やNHK「あなたのメロディー」、レコードはオリオンレコード[演歌系自主レーベル?]から数点)。北島町には昭和38年転入(それ以前は板野町の官舎)。70歳を契機に作曲にも挑戦。「北島音頭」を手始めに、「シベリア抑留歌」「佐那河内音頭」「藍住音頭」「隣組音頭」「グリーンタウンカラオケ会歌」等、多くの作品を手掛けた。平成19(2007)年3月5日没。90歳6か月の大往生だった。

■解明すべき謎が2つあった。「北島音頭」オリジナル版の完成時期とオリジナル版カセット音源の伴奏者の特定である。解明のためには、赤野さんの「私とギター」と題するエッセイが重要な証言となった。作成時期は1986年か87年頃ではぼ間違いはないと思う。また伴奏者は当時ご近所にお住まいだった石川美智子さん(現セイコー音楽教室主宰)である。

■赤野壽さんは、非常に筆まめで数多くの文章を残している(殆ど全て肉筆)。コピーさせていただいたのは「歌謡作詞集」、「私とギター」、「私の戦争体験記」、「妻の一生、私と妻の履歴」、「旅行記」などの作詞集やエッセイで、合計すると400字詰め換算150枚ぐらいの分量はあると思う。どれも非常に丁寧に書かれていて、文字が美しく読みやすいものだった。近年、政治家やその取り巻き連中には軽薄で情けない、言及するのも汚らわしい俗物が多いが、それに引き換え、市井(しせい)の人の中には本当に尊敬に値する人がいるのだ。かなうならもっと早くに赤野さんにお目にかかりたかったとつくづく思った。(2017年04月30日脱稿、文責＝北島町創世ホール囃託小西昌幸)

■赤野壽さんの業績について、可能なら次号でさらにご紹介したいと思います(小西)■